

< 巻頭特集 >

第 20 号によせて

高田 誠

「言語学論叢」誌も、このたび第 20 号を発行することになりました。数える上での一つの区切りをむかえこれまでの道程を振り返りますと、ここまでこられたのも、読者としての同学の諸兄姉の厳しくも暖かいご支援のおかげであり、執筆をした院生諸君の努力、教員諸氏の協力のたまものであると、あらためて、感謝の気持ちがこみあげてまいります。

この雑誌は、本学大学院の一般言語学コース、応用言語学コースの院生、教員によって運営されていますが、その名称をたどると、旧東京教育大学の言語学研究室の雑誌「言語学論叢」と縁があるようです。創刊号の前書きにそのようなことが記されています。旧「論叢」時代を知るものとして、いささかの感慨を覚える次第です。そこで、年寄りが昔話を申し上げるのは大いに気が引けますが、古い話を少しだけさせてください。

旧「論叢」は、1959年に創刊され10巻あまり発行されました。はじめは、ただ「～号」とし、英語の名称もありませんでしたが、5号目のときに巻号式に改め英語名もつき、研究誌としての体裁が整いました。たしか、小生、学部の3年生のときだったとおもいますが、今はなき関根正雄先生が、なにかの授業のときそのいきさつを話してくださいました。「欧文題をどうしようかと考え、Zetemata Linguistica がいいかとおもったが、ギリシャ語とラテン語とが混ざるのもなんとなく据わりが悪いし、やはり、英語で Studies in Linguistics にした。」ということでした。古典ギリシャ語の動詞 zeteo (長母音省略) は「追求する」で、zetemata はその派生中性名詞 zetema の複数形で「追求されたもの」、linguistica は新しい語だけれどラテン語の形をしていて中性複数です。大学3年生の眼前で、ギリシャ語とラテン語をあわせた研究誌の名前がさらりと話題になったわけです。なんだかめくるめく思いが頭のなかをきらきらと駆けめぐったことを鮮明に思い出します。

そのころの言語学専攻の主任教授は、熊澤 龍先生で、大戦前夜のドイツに留学されていたころのお話を思い出します。小生が入学したときの文学部長で、学長の朝永振一郎先生とともに、真っ白い御髪で入学式の壇上に並んでおられました。河野六郎先生は朝鮮語学の大家で、中国漢字音の研究者でもありました。それでいて、教室の研究会で、アラム語だったかヘブライ語だったかの Modus についての議論に割って入られる方でした。大きな体を丸めて、「いやあ、それはねえ君・・・」と、ちょっとはにかんだように話される様子が目に浮かびます。後年、文化功勞者として顕賞を受けられましたが、先年なくなられました。関根正雄先生は、旧約聖書学では世界的に知られた研究者で、イスラエルでは大変に有名です。後に、イスラエルの著名な言語学者カイク・ラビン先生からうかがったのですが、ヘブライ大学の講演では会場がいっぱいになる「スタープロフェッサー」だったそうです。小生などは、ヘブライ語などとても手がでなくて、古典ギリシャ語を受講していました。「(旧約聖書学が専門の) 僕なんかギリシャ語をもっていいかどうか分からないんだけど・・・」などとおっしゃりながら、Homeros の講読をなさっていたのです。「Homeros のなかのセム語的影響」などといわれても、大学3年生には何とかに小判でした。ドイツに留学中戦争が激しくなり、帰るに帰れず疎開先のアルプスで一冬中スキーをしていたことなど話してくださいました。日頃のお姿とスキーとはどうしても結びつきませんでした。矢崎源九郎先生は、天才的な学者で、はや 20 歳でビルマ語をなさり、戦時中、在日ビルマ代表の令息の日本語家庭教師をされていたそうです。ゲルマン語学、北欧語学をなさり、アンデルセンの研究はつとに有名です。「アンデルセンは本当はアナスンなんだけど」とつぶやいておられました。ゲルマン語学の演習で、ドイツ語の予習を怠って立ち往生している学生に、「きみ、それでも大学生ですか・・・」と、厳しく迫ってこられました。学部の2年生にですよ。しかし、授業料を滞納していた小生に、「きみい、お金ないの・・・？」と真顔で心配してくださる先生でした。残念ながら病を得られ、教室にでられるのも大変おつらそうで、学生たちは毎回恐縮の限りでした。天才は天逝すのとおり、1967年 45歳の若さでなくなられました。

非常勤で来てくださった先生方も多彩でした。サンスクリット語の辻先生は、「一人前になるには 30 年かかる」といわれます。「サンスクリット語が

読めるようになるのに 10 年、論文が書けるようになるまで 10 年、人が認めてくれるまでに 10 年」なのだそうです。学問とはそんなものかと、わけもなく感激したことを思い出します。満州語の山本謙吾先生は 2 年に 1 度のご出講でした。3 年生のとき「満文老とう (木偏に當の字)」の講読がありました。懐炉を胃のあたりに当てられ、「こうすると気持ちがいいんだよ」とおっしゃりながらの授業でした。胃に病をもたれていたのです。それが最後のご講義で、その 2 年あとのご出講はありませんでした。四十台半ばだったと思います。コピーなど手軽にない時代、手書きのガリ版刷りの資料で満州語文字の手ほどきをしてくださいました。徳永先生のハンガリー語は受講しませんでした。1 年下の女性が、ハンガリー語をやりたくて言語学を専攻したというのです。まわりの皆は彼女のために受講をひかえ、彼女は徳永先生を 3 年間独り占めにしました。われわれは、控え室で先生にコーヒーをお入れする役でした。インスタントコーヒーの出始めのころです。彼女は、いまなお、ハンガリーにかかわる活動をしているそうです。

研究誌の序としてはふさわしい文章ではないともおもい、昔の大塚と筑波とは別物であると承知してはいますが、節目の号数であることと、「論叢」という名前にいささかの感慨があることから、このような思い出話をしました。ご寛恕を。